

平成28年度学校評価報告書(自己評価)

本年度の重点目標

- 〔重点目標1〕 児童・保護者・地域から信頼される学校づくりを行う。
- 〔重点目標2〕 学校の特色を活かした教育環境の整備を行う。
- 〔重点目標3〕 分かる授業を目指した授業等の改善を図る。

	a: 評価項目 (取組の内容、目標達成のための手だて)	b: 取組の状況 (データや資料等を活用して説明)	c: 評価	d: 成果及び改善方策
重点目標1	児童・保護者・地域が安全指導と運動した、あいさつ運動を推進する。	児童は、運営委員会を中心にして今年度は、全学年を月当番としてあいさつ運動に取り組んだ。毎週水曜日に正門と裏門に児童が立ち、登校してくる児童を迎えた。	A	○今年度は、運営委員会の児童だけでなく、全校児童を動員したあいさつ運動に取り組むことができたことは成果である。地域保護者も登校時に交差点で安全指導を行いながら、ともにあいさつを行った。●児童のあいさつはよくなったと地域の方よりほめられた。さらに積極的に取組を進めたい。
	いじめアンケートにより、いじめの早期発見に努める。子どもつながりプログラムを実施し、よりよい人間関係の構築を図る。	いじめアンケートを行うとともに、教育相談を実施した。人間関係プログラムは、足立小の泉先生の指導のもと取り組んだ、中学校区で足並みをそろえるようにした。	B	○アンケートと教育相談により、児童の実態を丁寧に把握することができた。気になる事象については、いじめ防止委員会で共通理解し協議をすることで予防できた。子どもつながりプログラムの実践後に、教室の中から友達を傷つけるような言葉が少なくなったと報告された。
	保護者や地域の方々と連携を図り、適切な安全指導を行う。	保護者と地域の方が分担し、毎朝の登校時に安全指導を行った。年2回の集団下校時に、地域や保護者に見守りを依頼し協力を得た。	A	○見守り活動の成果として、大きな事故は発生しなかった。地域の方も通学路の改善など関係機関へ訴えている。●朝夕は、狭い通学路に交通量が多くなり児童にとっては危険である。交通安全指導など計画的に行い、充実させる必要がある。
重点目標2	地域の人材を活かした、学習活動の展開を図る。	地域の老人会や寿山市民センターのクラブ員の方に協力してもらい、総合的な学習でのゲストティーチャーとして授業を展開した。	B	○「昔のくらし体験」、「寿山のキラリ人発見」、「見つけよう日本のよさ、美しさ」などの学習で協力していただいた。担任教師だけでは深まらない範囲を補充できた。●事前の打ち合わせの時間の確保が難しく、当日になって思うように学習がまとまらないことがあった。
	学校図書館職員やブックヘルパーを活用し、学校図書館の整備を行う。	学校図書館職員により、図書室環境が整えられた。また、毎月2回ブックヘルパーによる読み聞かせを全学年で行った。	B	○図書館の環境が整い児童が楽しく読書できる場となった。また、教師によるおすすめの本や廃棄する図書の学級配布などで、本を手にとる機会を増やした。また、毎月の読み聞かせの時間を全学年児童が楽しみにしている。●家庭での読書の時間が短いので工夫が必要である。
	廊下や各学年の掲示板を中心に、掲示物の工夫を行った。学年の学習の足跡がわかり、他学年児童が見通しをもてる場とした。	学年の掲示板には、その学年の学習内容がわかり、児童の学びが見えるものを掲示した。また、各学年の児童の手本となるようなノートの提示を行った。	B	○各学年の掲示板では、学習の内容が分かるものを掲示し学年間の系統が見えるものになった。ノート展示は、短いサイクルで展示するノートを変えていった。●教室内掲示については、各学級で工夫が見られた。さらに学習の足跡がわかる動きのある掲示物にしていく必要がある。

重点 目標 3	スクールプランを教職員で共通理解し、わかる授業5つのポイントを踏まえた授業を展開する。	授業の自己評価カードを活用し、学期中に2回ほど授業の自己評価週間を設ける。また、授業の見通しをもたせるためのカードの活用を行う。	A	○自己評価カードの活用で、授業の中に書く活動や話し合いの時間が、設定されていないことに気付き、授業の中にその場面を設定するよう心がけるようになった。●見通しがもてるようにカードを活用することで、教師自身も授業展開を見直すようになった。さらに改善する必要がある。
	体力向上のため、日常的に外遊びを奨励し、たてわり活動などと連動し体力の向上に努める。	毎週水曜日の中休みを「寿山タイム」に設定、全児童が外で遊ぶようにした。また、たてわりグループを活用しなわとび集会に向けての取組を行った。	B	○運動場の改修工事のお陰で外で遊べる日が多くなり、児童は進んで外に出ている。たてわり遊びでは、なわとび集会に向けて、全校で練習に取り組んだ。持久走の取組では、コースを変更し変化のあるものとする事で児童の意欲を高めることができた。●継続して取り組むことが大切である。
	児童一人一人の教育的なニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う。	特別支援教育センターの巡回相談を利用し、適切な支援のあり方を探った。さらに教育相談につなぎ、保護者と連携して配慮の必要な児童の支援に当たった。	A	○特別支援教育部会を開催し、配慮の必要な児童の共通理解を図った。その際には、特別支援教育センターからの情報も活用した。また、初めて特別支援学校のセンター的機能を活用し、児童の実態把握を行った。●配慮が必要な児童が多くなってきている。さらに関係機関との連携が必要である。

※評価(例) A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった